

第12回福祉セミナー

福祉課

「精神障害と家族」を考える

うつ病、統合失調症、依存症といった「精神障害」の患者数は300万人以上に上り、国の五大疾病の一つに数えられるほど、誰もが罹る可能性がある。しかし、地域社会の理解が得られず、支援の手も不足していることなどから、当事者や家族が偏見に苦しんだり、誰にも相談できずに孤立したりするケースが少なくない。布教部福祉課（高見宇造課長）は2月26日午後、「精神障害と家族」をテーマに第12回「福祉セミナー」を親里で開催、24人が参加した。このセミナーでは、大阪府立大学地域保健学域准教授の三田優子氏と、精神科医の夏刈郁子氏が講演した。

「精神障害当事者の声、家族の思い」と題して登壇した三田氏は、冒頭、精神障害者や家族が集うグループホームを立ち上げ、当事者の声に耳を傾けるようになった経緯について話した。

そのうえで、当事者は援助者にもなり得るとして、当事者が学校や企業で自らの体験を語る活動の模様を紹介。『みんな私なんて…』と自信を失くしている

当事者の経験が、誰かの助けになっていく。多くの人が悩みを抱え、生きづらさを感じる世の中で、当事者や家族が自らの経験を生かして、他者の心に寄り添うことができる」と述べた。

また、当事者の家族には「発病したのは自分のせい」「近所や親戚に病気のことを隠している」と話す親が多いといった点を指摘した。この後、ひきこもりに悩

む家族と関わった自身の体験を紹介。8年間、自室に閉じこもって家族とも顔を合わせなかった息子へ、母親が食事と一緒に手紙を届けるようになったことから、その後2年を経て社会復帰できたエピソードを語った。

最後に三田氏は、精神障害者やその家族は身近にたくさんいるとして「支援者は、当事者を一人の人間と



参加者たちは講師の話を通して、精神障害者や家族への支援のあり方について学んだ

(2月26日午後、天理大学ふるさと会館で)

して敬意をもって接し、また家族は、自分自身の人生も大切にしてもらいたい」と呼びかけた。続いて、夏刈氏が「人が回復する」とは、どうい

「何か？」と題して講演。母親が統合失調症で、自身も精神疾患を患った過去を持つ夏刈氏。家族、当事者、精神科医としての三つの立場から話した(要旨別掲)。